會報

昭和九年三月　34　日本山岳會

酸素吸入器と孵卵器

松方三郎

一九三三年のエヴェレスト登攀隊が如何なる成果を齎したかを研究することは興味の深い問題であらう。エヴェレストの登攀丈けでも既に四回目であり、一九二四年此の方ヒマラヤに於ける登攀に關しては一般的に可なりの經驗も積まれてゐる筈であるのに、今回の計畫が一見華々しい成果を齎さなかつたやうにさへも見えることは、特別に我々をして此の點に注意を集中せしめずにはおかない。例へば登攀し得た高さ丈けからすれば今回のそれはノートンの樹立した記錄を大して凌駕したとは考へられないのであるから。

併しそのノートン自身は昨年十一月六日の地學協會でなされた隊長ラトレッヂの報告の後に、今回の登攀隊が完全にポーターの問題を解決し了せたことは最大の功績と認めらるべきであると述べてゐる。一般にヒマラヤの探險隊がポーターの問題で何時も難關にぶつかつてゐるのはよく識られて居る所であるが、エヴェレストにしても何時も之が登攀隊の頭痛のたねであつた。それ故昨年の登攀隊が此のポーターを驅つて二萬七千四百呎の高さに天幕を張らせたといふこと、而も彼等ポーター達が登るに從つて意氣大いに上り、その上に彼等が登攀その物に遂に興味と關心とを持ち出すに至つたことが明かにされたといふことは、ヒマラヤ登山にあつては殆んど劃期的の事柄として特筆大書されるに値する事なのである。

高さに對する馴致の點からしても今回の登攀は非常に大きな經驗を齎したことは爭はれない。此の點では今回は從來よりも遙に計畫的に登攀隊員をして高さに馴致せしめるやうに旅程が造られてゐたのである。一行の大部分が二萬四千呎のノース・コル以上の高さで連日の活動を續け特にその中の一人の如きは二萬七千四百呎の第六キャムプに三晩も續け樣に泊つたといふことは、一九二二年の謂はゞエヴェレスト草分けの時代に於いては何人も夢想だにしなかつたことに相異ない。ノートン等が一九二二年に初めてノース・コルをさして上つて行つた時には果してその上で人間が酸素吸入器の助けなしに棲息出來るかどうかさへも疑問にしてゐたといふのであるから恐るべき變化である。私は今回の登攀隊の連中は、適當に高さに對して馴致しその上好い天候に惠まれさへするならば、全然酸素筒の助けなしに二萬九千呎の頂上まで達しうるといふ自信を造つて來たやうに感じた。併し乍ら此の馴致性が個人々々によつて異る——即ち種々の高さの段階によつて人々の受ける影響が夫々に異り又馴致の速度も決して同じくないといふ所から、ラトレッヂが述べてゐるやうな、いざといふ時に、最上のコンデイションにある隊員の四人或は六人を何時も準備しうるといふ希望は、仲々算盤球をはぢくやうには實現出來さうもない。此の點ではまだ相當の研究が必要であらうと考へられる。

登攀のルートについても今回の登攀隊は非常に重大なる發見をしてゐる。尾根沿ひの登路が先づ問題にならないといふことはウェイジャー、ウイン・ハリス兩人が大體確めてゐるし——序で乍らウェイジャーは歸りがけに尾根の上まで登つて行つて東南面の氷壁を瞰下してゐる。之は勿論初めてのことである——雪の大クーロアールに入るのにノートンのルートよりも幾分下目にからんで行つた方が、向ひ側の小さいクーロアールに入るのに都合がよいであらうといふことも大體確められた所であらう。同時に又、今回の經驗よりして、最後の一千呎は仲々生やさしいものではなく、新雪でもかゝれば、到底手におへないスラブの連續であるといふこともはつきりしたわけである。謂ひかへれば雪が溶解することのない、從つて新雪がいつまでも粉雪狀態で殘るあの高さでは、モンスーンが始つて雪が連續的に降り出しては頂上をかけることが不可能に近いといふことが判つたわけなのである。

要するに大體の結論は好天三日に惠まれゝば何とか頂上に達し得る見込がついたといふ所であらう。尤も最後の一千呎は難しいとは云ひ乍ら、も手を觸れた上での事ではないから實際にかゝつて見れば想像以上に一層の難物でないとは限らない。併し何れにしても、今回の登攀によつて大體の問題の見透しはつけたらしく見えることは、何といつても重大な進歩と云ふことが出來る。

服裝についてはグレンフェル二重作りの上・下衣は殆んど完璧であつたと、一人の登攀隊員が私に語つて

主要目次

★酸素吸入器と孵卵器……松方三郎
★山岳博物館とレリーフ……高橋健治
★一九三二年のミニヤ・ゴンカ登攀概報……黒田孝雄
★山と釣……五
★會員通信……四
上信國境の縱走……角田吉夫
エヴェレスト登山禁止令……T・F
★會務報告……五
山日記一九三四年版發行に際して
新入會員、退會者、會員住所變更
新着圖書、購入圖書、會員寄贈圖書、新刊紹介、會員訃報

ゐた。靴もさうであつた相である。獨逸映畫の「ヒマシャール」に誇示されてゐるやうな具足がらみの重裝主義とは可なり反對の、極くあつさりした服裝である丈けに、充分味ふに足る事柄であらう。天幕についてもワトキンス考案の蒙古型天幕が恐しい威力を發揮したといふからには、將來必ずや此の方面での新工夫が施されることであらう。一九三三年の經驗ではラヂオが非常な効用を示してゐる。將來はラヂオを一層高い地點に迄持つて上る工夫をするであらう。昨年の場合はノース・コルと根據地とは有線電話で連絡されてゐたがノース・コルで、改善された天幕その他によつて相當に充分外界から保護され、連日の活動を續けうることが證明された以上、將來はノース・コルの第四陣地がもつと重大な役割を演ずるに至ることは疑ふ餘地がない。

總ての一九三三年の收獲を綜合して見る時、將來の登攀の成敗は第一には天候、第二には登攀隊の陣容の充實にあるが如く考へられる。第二問題は何とかなるとしても第一の問題はその場合に當つて何となるかは全く見當がつかない。それにダライラーマの薨去によつて探險隊の西藏入國當分罷りならぬとあつては、ヤングハズバンドのラツサ遠征の二の舞でもしない限り、埒はあかない。ダライラーマの薨去がエヴエレスト登攀に影響がありはしないかといふことは現にその當時にロンドンで相當切實に皆の心配のたねとなつてゐたことは事實であるが、其禁止が果して今回の登攀と何等かの因緣を持つてゐるか何うか——謂ひかへれば登攀その物がダライラーマの御壽命を縮め奉つたのであると西藏側で解されてゐるか何うかは——は相當エヴエレスト登攀の將來に重大な關係があるものと云ふことが出來る。ダライラーマの御壽命に關係のあるのは登攀隊の方ではなく、實は、飛行機で頂上の周りをかすめてエヴエレストを征服したなどと大太鼓をたたき、さてはエヴエレストもマカルーもチヤムラングもちやんぼんにして憚らないやうな、周章者のハウストン飛行隊の方なのであるなどと、それとこれとの見境ひをよくつけて呉れゝばよいが、新しいダライラーマは何れは前の活佛の御生れ替り故とてもまだ東西も判らず、況んやそんな事では說得は難しい。さうして攝政が責任をとつて居る間は、或は探險隊が再び國境を西藏へ越すといふことは出來ないかも知れない。赤ん坊を孵卵器式の道具にでも容れて速く大きくする工夫はないものかと自分の體驗から考へたこともあるが斯うなつて見ると、ケインブリッヂの研究所なども、人間を箱に入れて中の空氣を段々拔いて高さの人體に與へる影響等を研究するよりは、さし當り、此の孵卵器式の物を考案した方が早手廻しかも知れない。

山岳博物館とレリーフ

高橋　健治

山岳に關する博物館と云ふ限り世界にその所在を訪ねると、到る所、鄉土愛にその動機を持つて作られた山岳に關するあらゆる陳列館を擧げることが出來るから、それを數へ來れば幾らあるかわからない。

先づ二三の例を擧げても、クラーゲンフルト、ツエルマツト、クールマイエル、シャモニー、ビエルラクール、グラーツ、ザルツブルグ、インスブルツク、リンツ、ベルヒテスガーデン、クーフスタイン、バルテンキルヘル、アオスタ等々、遠く離れてはケスマルクやツアコバーネのタトラ博物館、さてはテイフリスのカウカサス博物館等と枚擧に遑がない。然し、相當內容のあるものでは伊太利山岳會の持つツーリンのもの次にスイス山岳會のベルンのもの、それから獨墺山岳會のミュンヘンのものと三つを擧げることが出來るであらう。これらの博物館の發達の歷史內容及その設備關係者などに關する記載を私は外遊先きから嘗て東京の山友に送つたのだつたが、その原稿をどうしたのか或は失つたのか、そのまゝになつてゐるので、その當時を思ひ出して、こゝに一寸山岳博物館に關心を持つて見た。

山岳博物館である以上、山の道具ピツケル、アイゼン、輪カンヂキ、ワラジ等、鄉土を異にするに從つてその型を異にし、又は時代を異にし登山技術の變遷と共にその形も變化して來たからそれらを時代的に陳列して系統を得ることが出來よう。又所々の山小屋の模型を作るも面白からう。或ひは有名な登山家の肖像、又は歷史的登山の模樣を繪畫で表はして記念したり、有名な山岳、探險せる遠方の山々の寫眞や繪畫等も亦地方別にして配列することも出來よう。

植物、動物、地質、鑛物の標本などそれが山に關する限りこれを系統的に陳列することも得る。さては山民の風俗習慣を簡單に知らしめるための標本をも陳列する事が出來る。この頃の樣に登山が盛んになれば登山團體の地方分布模樣或は山へ出かける人數の統計結果を揭げたり、最新登山技術を人形を以て數示したり所々へ探險隊が出る樣になればその蒐集物、寫眞などを美しく配列することも出來るだらう。然し以上幾多の陳列品よりも、登山家にとつて有用なのは、正確なる地圖と、その地方の寫眞と、その山岳の模型（レリーフ）とである。斯う三因子揃つて陳列されると、その初登攀を論じたり、探險の計畫をしたり、又は中部信飛連山を問題にしてはバリエーションを語つたり、大衆には山への豫備知識の又とない良い手引きとする。

我國にも山岳の地圖、寫眞の進步は近年著るしいが、その模型（レリーフ）の作成者に至つては全然之を見出さなかつた。二三物好きに地質學研究の目的を以つて各大學等の地質學教室で、少しの經驗者に作らした、富士山や溫泉嶽等のレリーフはあつても、登山者の欲する山その物を藝術的にそのまゝを、作り出した物を見なかつた。然るに最近私は京都帝國大學地質學諸教授の指導の元にレリーフ作成に精進する無名の青年を見出した名を井手六治氏（住所左京區田中大久保町六八ノ一）といひ、彼氏は已に上高地の五萬分の一地圖によつて石膏ではあるが、非常に精巧にそのレリーフを作成した。追々日本アルプス全般に涉つても作つて見たい希望を持つてゐられる。

山を見たことのない彼氏が、穗高を地圖だけに依つてかくも精巧に作り上げるかと思ふと驚く他のはない又白谷など地圖が間違つて居ればその間違つた通りに山が浮彫されてくる。それにつけても正確な地圖が欲しいものである。

ミュンヘン山岳博物館にあるエベレストの模型、それに同じ大きさのレリーフのマツターホルンを横に並べて、そのマッシーブの比較をすると如何にマツターホルンが小さいかが一目瞭然である。吾々も亦槍ケ嶽とマツターホルンとエベレストの同大模型を彼氏に作つて貰つて、その大いさを比較する樣な時代、山岳博物館を夢みて筆を擱く。

一九三二年のミニヤ・ゴンカ登攀概報

黒田孝雄

ミニヤ・ゴンカは、從來 Bokunka, Gangka, Mt. Koungka, Minya Konka と種々に呼ばれてゐるが、アーノルド・ハイムの研究によれば Minya Gong_kar といふのが最も原音に近い稱呼であるといふ。こゝには繁雜をさけて、ミニヤ・ゴンカといふ名稱に從つて置く。

青海のアムネ・マチンを北の一端とする東チベットの國境山脈は、略南東に走り、その末端は數列の山系に分れ、その一つは支那本部に入り楊子江の沿岸に至つて一つの群峰を形成する。これが即ちミニヤ・ゴンカ群峰であり、川邊の打箭鑪、巴塘と結ぶ線を略北の境とし、東と西とを楊子江の二支流、ヤアロングとツングの河を以つて劃し、南を楊子江本流によつて境とする地域を占める山岳地帶であり、二五〇〇〇呎、二一〇〇〇呎の間を上下とする幾多の高い峯から成つてゐる。その盟主こそ、こゝに述べるミニヤ・ゴンカであつて、ロックは之を二五六〇〇呎ムアは二四九〇〇呎と測定、ハイムまた七七〇〇米と測定したが、この群峰の最高峯たるを失はない。

ミニヤ・ゴンカの東面は、ヤンツコー、ハイロコーの二氷河を隔てて、孫逸仙山（七七〇〇米—ハイム）に相對峙し、その兩面は二つのゴンパ氷河（ハイム）を擁し、南面はチュ・タイ等の氷河を懸けて、共にビュウチウの谷に面し、北面は、この度のルートとなつた西北山稜を以つて、Longgomain, Daddomain の諸峯に連なつてゐる。

ハイムによつて『支那のマツタアホルン』と命名される程の堂々たる三角錐の山容は、打箭鑪から南方へ約四十哩を隔てて聳えながら、早くから、多の人々の注視の的となつてゐたことは、一九〇二年成都—巴塘への旅行をしたエドガアの最初の發見以來、その地方の多くの外國旅行者によつて、その位置などが議論され、記錄されたことによつても分るであらう。測量、學術研究、等の目的によつてこの地方に入れる人々は極く最近だけでも、ローズヴェルト、ステイヴンス、ロック、ウアードハイム、などを數へ上げることができる。しかし、これらの人々は、ミニヤ・ゴンカそのものに對しては云はば消極的に振舞つたものである事は云ふまでもない。

しかし、この支那のマツタアホルン、ミニヤ・ゴンカも、いつまでもその處女峰を誇りつゞけることは許されなかつた。といふのは、一九三二年、少人數の一パーティによつて案外簡單に片づけられて仕舞はねばならなかつたからである。

この證頂記錄は、この地方に於ける登攀史の第一頁を飾るに足るものであるが故に、またかゝるものとしその概要を述べることは、あながち無益な試みでもあるまい。

一九三二年、ミニヤ・ゴンカに登攀のパアテイは、左の四名より成るアメリカの小さな隊であつた。

Richard L Burdsall, Arthur B. Emmons (III), Jack T. Young, Terris Moore.

このうちヤングの一九二九年同地方に於けるケリー＝ローズヴェルトエクスペディションに參加した支那系米人である。前二名は共にエンジニアであり、その隊の測量を受持つた。

BとEとは同年六月下旬上海を先發、楊子江を遡つて目的地に達し、八月までにはミニヤ・ゴンカ中心の測量を完了した。YとMとは登山用具の調達などに忙殺され、上海を出發したのは八月上旬である。かくて九月半ばミニヤ・ゴンカのチベット側にある測量キャンプに四人が落ち合ふことができた。

先發のB・Eによつて測量かたがた偵察された結果によれば、ミニヤ・ゴンカへの唯一つのルードはその北西稜によると豫定された。が尙この事實を確める必要から、ツェーメ・ラを越えてビュウチュに入つた彼等は、そのうちEとMとはパワに下り一の支流より、一つ氷河（恐らくハイムのタイ氷河に當る）を登り、一五五〇〇呎にキャンプ、翌日一九〇〇〇呎まで登り續けて北西稜登攀可能を確かめ得て、かくて一行がゴンカ・ゴムバの根據地（一二〇〇〇呎）に落ち着いたのは十月一日である。

翌二日からいよ〳〵登攀が開始されることになつたが、季節は既に晩く、雪の心配は目の前に迫つたため仕事は出來る丈け速かに運ばれる必要があつた。それがためには、メムバーの少數であることも必要であるが、なるべく荷物を簡單に輕くし、ベイスキャンプ以上のハイヤーキャンプの建設、それへの荷物の運搬は全くこれらの登攀員のみによつて行ふことが肝要であつた。ハイヤーキャンプに人夫を使用することは、登攀速度の點から之をさけ、彼等は主として、ベイスキャンプまでの種々の仕事を受持しめた、その指揮にはヤングが當ることになつた。またゴンカゴンパのラマの好意によつて人夫の傭入も都合よくいつた。

かくて十月二日、四名のパアテイは六名のポーターと共にゴンカ・ゴンパを跡に出發、ハイムの『クランネ・ゴンパ』の谷を遡り、一三八〇〇呎の北西稜の麓に當る美しい草地にベイスキャンプを設けた。

四日、B、E、Mは、前日達し得た一五五〇〇呎の個所を越へ、『ロック・ピラミッド』と稱する一七〇〇〇呎の處に達し、こゝをICと定めた。

六日、E、M、は北西稜へのルートを偵察しつゝ、遂ひにその平坦な山稜（一九〇〇〇呎）に辿り着いて、ICに戻る。八日にもこの山稜に登つたが、南西風にひどく苦しめられた。ICに一日を休養、その晩には多量の降雪があつたが、翌十日には四人揃つて出發、遂ひに一九〇〇〇呎の山稜上にIICを設けることができた。

十一日、E、M IICより出發、偵察を兼ねて一九五〇〇呎の處に達した。十二日、テント食糧を用意して二〇〇〇〇呎のキャンプの準備に登る。一日休養、十三日には十二日に登つた所にIIICをつくる事ができた。十六日、頂上へのルート偵察のため、E、MはIIICより荷物なしで登攀、その午後二時までに、二二五〇〇呎まで達し、EはIIICへ、MはIICへ下つた。その夜は暴風に見舞はれ、翌朝Eの報告により、IIICのテントはE諸共吹き倒された事を知り、E、Mは休養かた〳〵BCに下り、BのみICに殘ることとなつた二日の後、二十日、YはBCに殘りE、Mは再擧、BCを出發、ICに

てBと一諸になる。翌日、ⅡCへ荷物を引上げ、二十二日にはⅢCを取戻すことができた。二日をⅢCに暮し、二十五日、二一五〇〇呎の處にキャンプの用意をなし、翌日にはそれを完成してⅣCとした。Bは、しかしまだ高度順應が充分でなく調子が何となく惡かつたが、Eが不注意から指に怪我をして了つたので、最後の登頂は、MとBとによつて行はれることに決した。二十七日はⅣCに一日を休養。

登頂決行の二十八日は來た。EはⅣCに居殘り、M、Bは、最後の二五〇〇呎を目がけてⅣCと發したのは午前五時であつた。その八時半には、十六日に登つた二二五〇〇呎の地點に達し得た程調子は非常によくクランポンのみで、別にステップを切ることもなく、登高は捗つた。登るに從つて山稜は急さと狹さとを增したが、それでも大した困難には出會はずに、最後の小さい壁を攀ぢ、午後二時四十分にはミニヤ・ゴンカの頂に立つことができた。天氣は素晴しく、西方チベット側はよく晴れてゐたが、支那側は一面雲海であつた。支那、米國の旗を立てなどして頂上にあること約一時間。降りにかかつた。ⅣCにてEと共に夜を明かし、二十九日、Bの調子惡く、Eまた指の痛みをぶり返し、道は捗らなかつたが、無事、ICに降ることができた。

登頂はかうして終つた。E、Mは十一月五日、打箭爐に歸り、BはBCの整理をなし數日後、E、Mと一緒になつた。Yとは十二月初め落合つた。

かくこてのミニヤ・ゴンカの登頂は、非常に容易に、且つ無難に行はれて了つたことは、何か物足らないでもないが、この地方が、尙『測量時代』に屬し、多くの山も無名のものの多き現在、アメリカによるこの處女峰の登頂は、たしかに一つの劃期的記錄たるを失はない。そして、また、この事は他の多くの新しい嶺への登頂に刺戟を與へずには置かないであらう。ことに、かゝる多くの山岳を數多く有する支那と隣同志の我國に於ては、尙更であらう。

成都、タツツエンル、バタン、ラサを結ぶ鐵道が完成せずとも、楊子江により又は南方よりハイムのルートによりこの地方に入ることは比較的簡單であらうから、これらの地方の處女峰の一つでもが、我々の手によつて征服される時代が來ないとは云へない。

參考文獻

1. Terris Moore, The Ascent of Minya Konka A.J. Nov. 1933 p. 290.
2. The Minya Konka Climb, American Alpine Journal. 1933.
3. Arnold Heim. Minya Gongkar. 1933.

エヴエレスト 登山禁止令

去る三月六日付東京朝日新聞所載のロンドン發電報は、西藏のダライラマが、先般のダライラマの死とネパールの震災とは、エヴエレスト峯探險が神の怒りに觸れたためであるとなして、向ふ十八年間その探險を禁止した旨を報じてゐる。

電文簡にして詳細を知るよしもない、從來もエヴエレスト・エキスペディションの必ず遭遇する難關の一つであつた對西藏の政治的交衝は今後十八年間先づ望みのないものとなつた譯である。禁止令の內容がエヴエレスト峯のみの探險に關したものであるにしても、同峯征頂の可能性ある唯一の登路たる東北山稜に到るにはどうしても西藏國內を通過しなければならない以上、地球上の最高點は英國人の手によつてと力んでゐる英國山岳會はもとより全世界の登山者にとつて今次の禁止令は大きな失望を齎らしたものと言はねばならない。まして西藏の例に倣つてネパールなどでも同じやうな擧に出ればこゝ數年來めきめきと昂まつてきたヒマラヤ遠征熱は遺憾ながら一頓挫を來たさざるを得ないであらう。

一九三三年の第四次遠征を最後として、全世界の登山界が當分の間エヴエレストを間近くより仰ぐことが出來なくなつて了つたのはなんとしても物足りなくもあり、また寂しくもある。(T・F)

會員通信

上信國境の縱走

三月十八日　快晴　信州山田溫泉(九、三〇)—御飯山—小串鑛山(五、五〇)

十九日　雪後快晴　土鍋山に登る

二十日　快晴　小串鑛山(六、〇〇)—小鍋山—浦倉岳—四阿山(二、〇〇)—菅平(五、一〇)

一行　岡本勝二、水野啓治郎、角田吉夫

快晴に惠まれて愉快な縱走の三日間でした。藏王のやうな奇怪な樹氷の林、彌陀ケ原を思はせる高原の連續でした。

御飯、浦倉附近の地形は複雜であり、密林のために、吹雪の時は相當に迷ふ個所でせう。危險地としては四阿山附近の狹尾根です。粉雪の爲ピッケルも、カンヂキも効を奏さず最も弱つたところでした。

小串硫黃鑛山は六百人からの人が居り活氣ある生活をつづけてゐます

(角田吉夫)

山と釣

山と釣。一見何の關係もない。

しかし、會員のうちでも田中、角田兩君などよく釣竿かついで毛度澤へ出かけたといふ話をきいたが、山を歩いて鮎をつつて、食事を賑はせることなど我々のよく經驗する處であるが、それが、マニアになると釣に山に出かける樣になるのも自然であらう。

所で、近頃會と同樣の略稱を用ひた會があるらしい。同じJACなのでまぎれ易い。それに、その會なるものが又『山日記』と同じやうな『釣日記』といふ奴を出してゐるし、その背を見ると『JAC釣日記』と題するからだ。氣の早い速中は日本山岳會が釣日記を出してる。なんてさはぐかも知れない。しかし、この釣日記のJACは山のJACとは異るのであつて、前の方はジャパン・アングア・クラブといふ會であり、山の方はジャパニイズアルパインクラブの略なのだ。しかし『日本山岳會釣日記』としてあれば、問題にもなるが、JACでは、もともと略稱なので、問題にもなるまい。せいぜい『釣』られないやうに、注意して置く必要があると思つて山と釣とを一席辯ずること、如件。(くろだ生)

會務報告

三月定例理事會

三月八日午後六時半より事務所に於て出席、小島、高頭、冠、槇、松方、神谷、茨木、飯塚、額田、三田黒田

一、山岳第二十九年第一號編輯ノ件（黒田）

一、山日記編輯ノ件（黒田）

一、黒部川保勝運動ニ關スル件（冠）

一、山小屋雪崩調査ニ關スル件（額田）

一、會員優遇ニ關スル希望（小島）

退會者

昭和九年三月中

（五〇二）　神戸市　松本良一

（九九〇）　京都市　水谷益之助

（一〇四八）　長野縣　長野中學校山岳部

新着圖書

山　三月號　梓書房
登山とスキー　同　黎明社
嶺　第二號　京都一中山岳部
ケルン　三月號　朋文堂
山小屋　同　同
山と溪　同　山と溪の會
獨立樹　二月號　東京山旅倶樂部
旅路　三月號　關東旅行クラブ
アルカウ趣味　同　日本アルカウ會
管見錄　二月號　大阪管見社
山　三月號　横濱山岳會
旅行　三月號　東京旅行クラブ
山行案内同　昭和マウントクラブ
樹氷　第十六號　山人倶樂部
山彦　三月號　東京山彦山岳會
ビヴァク二月號　ジャパン・ビヴァク・スキー・クラブ
旅　三月號　東京アルカウ會
山人會月報　第十九號
明峯山岳會々報　第二一號
廣島山岳會々報　第三五號
武藏山岳會々報　三月號
東京市山岳部パンフレット　十四號
日本登高會々報　第三〇號
登歩趣味會々報　第一〇號
東京登歩溪流會々報　第三號
がくれい會々報　第二八號
奈良みなかみ會々報第三二、三四號
行雲會々報　第一號
白馬登山會々報　第二號
大一マイロー會々報　第三一號
山の旅會々報　第三九號
神戸アユモ會々報　第四一號
O.S.C.タイムス　第一號
臺灣山岳彙報　三月號　臺灣山岳會
寫眞月報　二、三月號　小西六本店
奬健　二、三月號　奬健會ワンダーフォーゲル部
ツーリスト　三月號　ジャパン・ツーリスト・ビューロー
Manuel D'Alpinisme Tome, 1/11.
Bulletin Appalachian Mountain Club, Vol.XXVII, No.6, Feb. 1934.
The Prairie Club Bulletin, No. 233, Feb.1934.
The Mountaineer, Vol.XXVI, No.3, Feb.1934.
Trail and Timberline, No.184, Feb.1934.
Die Alpen, No.2, Feb.1934.
Club Alpino Italiano, No.12, Dic.1933, No.1, Jan.1934.
Bulletin du Club Alpin Belge, Tome X, No.32 Oct.1933.
Unione Ligure Escursionisti, Anno XXI N.1 1934.
Centre Excursipnista de Catalunya Butlleti Num.462/463, Nov./Des.1933.

購入圖書

C.J. R.C.E. Schomberg:—
Peaks & Plains of Central Asia, 1933.
C. Wessels, S.J.:—
Early Jesuit Travellers in Central Asia, 1603-1721, 1924.
Houston:—
First Over Everest (The Houston-Mount Everest Expedition, 1933)
Elizabeth Knowlton:—
The Naked Mountain, 1933.
Giotto Dainelli:—
Buddhists and Glaciers of western Tibet, 1933.
Arnold Heim:—
Minya Gongkar, 1933.
平賀文雄著　八ヶ岳火山群
同　赤石溪谷
百溪祿郎太著　祖母岳
加納一郎著　北海道のスキーと山岳
藤本九三著　峰・峠・氷河
大日本地誌大系　第三、第四

會員寄贈圖書

The American Alpine Journal
Vol.1, No.1, 1929.
Vol.1, No.2, 1930.
Vol.1, No.3, 1931.
Vol.1, No.4, 1932.
Vol.II, No.1, 1933.
松方三郎氏寄贈

臺灣南湖大山山彙に於ける氷蝕地形に就て（地理學評論別刷）　田中薫氏

登山スキー術の手引（改訂第二版）　德永正雄氏

會員訃報

名古屋市　坂田治三郎氏（大正六年九月入會、會員番號五六〇）昭和九年二月三日逝去せらる、本會は玆に謹みて哀悼の意を表す。

山日記一九三四年版發行に際して

本年山日記は第五回目の編輯であります。一九三〇年版の第一號より列べてみるのに、その變遷は實に感慨無量のものがあります。

編輯上の技術には大きな進歩の跡は明瞭にみる事が出來ます、內容に於ては、多少の興廢は繰り返へされながらも、多年各擔當者の努力に依つて、改善充實された事は驚く可きものがあると信じてゐます。

毎年發行と共にこの山日記に寄せられる希望又は意見を述べられたるカードの數は非常なるものです。一枚一枚が皆、編輯者の心にピンと響く力强さを持つてゐます。これある爲に編輯者は確固たる方針の下に改革のメスを振ふ事が出來るのであると、心から感謝してゐます。

今年の山日記も、大體昨年通りの方針に從つて編輯されます。

山小屋山案內登山團體の調査も一先ず終了して、整理中であります。其他各項の加筆もすゝめられてゐます。

今後とも山日記が完璧なる理想の域に到達する爲に、大いに會員諸兄の御援助と御敎示を希望して止みません。

將來の山日記がどんな姿となるか大きな變革が起るか、腹案はあると

しても、實現については、尙研究の餘地は大です。腹藏ない御意見を賜り度い次第です。

山日記 一九三四年版
發行 五月中旬
定價 一圓
頒價 會員の特別割引の制度は昨年通りの豫定、詳細は追て發表します。

山日記編輯委員

新刊紹介

スキー、ツーア 菅沼達太郎著
大村書店發行 昭和八年十一月
定價一圓

東京を中心とせる、本州中部より東北方面の一部に至る、スキー練習場及スキー、ツーアのコースを說明する案內書である。

スキー術習得者の山へ、ツーアーへの第一步を踏み出す可き、意圖を著者は抱いてゐるやうである。簡單なるコースより、縱走、山越え等に及び、卷末にはアルプス地方の說明も加へてゐる。

一讀後の感想を素直に述べれば、內容は餘りに主觀的であり、廣範圍に及び、各項の說明は疎にして、不親切なきらひがある。

ガイドブックの生命は、山に志す者が手にして、心から信頼し得る、充分なる親切さが欲しい。

一つの斜面をシュテムボーゲンで降らうが、キックターンを繰り返さうが、各自の自由にして、その技術に應ずべきである。むしろ要は、多角的な觀察を欲してゐる。一月と三月の狀態の大いなる變化とか、ラヴイーネンツークの注意とか、地圖上の明瞭なる誤謬や、特徵を述べる事は、どれだけ登山者の疑懼を和げるであらうか。

限りある經驗に於て、個人の力により廣範圍のガイドブックを著すといふ事之れ自身に既に無理が起るものであらう。スキーツーアが大衆の間に隆盛に向ふ今日、かゝる種類の著作は特に愼重に取扱はれなければならないと信ずる。（角田）

編輯後記

△內容からみて此號は相當充實してゐると思ふ。貴重な原稿を寄せられた方々に當番として感謝の意を表したい。尙、今後益々旺んに投稿せられるやう切望します。

△印刷所に原稿を渡してから二週間經つても校正が出なかつたり、同じ市內の然も速達便が五日がゝりたつたり珍妙な現像が障碍して今月も亦大變に遲れたことをお詫び致します

昭和九年四月七日印刷
昭和九年四月十日發行
發行者 額田敏
編輯兼印刷人 福島昌夫
東京市芝區琴平町二
發行所 日本山岳會
不二屋ビル
電・芝・一六四九番
廣告一手取扱 進恒社
電・四谷・五六一番
（昭文社印刷所）

FIRST OVER EVEREST

The Houston-Mount Everest Expedition 1933
By Air Commodore P.E.M. Fellowes & Others
Squadron Leader The Marquis of Douglas & Clydesdale
With 57 Iustrations from Photographs, Diagrams and Maps Medium 8vo. **Price**, ¥10.50
(Postage, 22 sen)

世界の屋根エヴエレスト遂に征服さる!!

嘗てノルトン中佐、ソマーヴエル氏の努力も空しくまたマロリー・アーヴイン兩氏の犧牲の前に人力未だ大自然に及ばざるかと三度嘆ぜしめたるエヴエレスト絕巔一遂に昨年四月三日旋回飛行機により探檢に成功し、千古の大神秘境は初めて人間の歷史にその眞相を詳細に齎らした。もとより科學的研究を目的とせるもの、フイルム製作や冒險旅行と異るも、氷雪を嚙み上空と下界の間に死を決して惡戰苦鬪せる學界勇士のこの貴い記錄は探奇以上の新しいスリルと一種の崇たる憬仰の念にうたれるものがある。殊に近時西藏ラマは宗教政策上、向後數十年この聖壇に登高禁止の令を發せりと聞く、果して然りとせば本書に優る新書は當分絕無と謂ふべきであらう。

東京日本橋通
大神京名古屋阪戸都 **丸善株式會社** 横濱仙札京濱岡臺幌城
東京＝神田•三田•早稻田•丸ビル

—新刊近着— **Scrambles in Japan and Formosa**

By The Rev. W.H. Marray Walton
Wich 24 Plates and 2 Folding Maps
8 vo ……Price, Ca 18/-

Weston の Japanese Alps 開拓以來外人にして日本の山の紀行を叙せる最初の單行本。著者は日本山岳會員として山より山へその足跡の普さは遙かに邦人を凌ぐ。南北中央アルプス、木曾御嶽、秩父三峰より藏王、吾妻の連峰に互り、更に臺灣の新高その他まで前人未踏の高原を橫斷縱走せるものもある。それ等の登攀記を收錄せる本書は外人が日本の山に對し如何なる印象と感懷を產めるかにつき極めて新しい興趣を嗾るものがある。